主体的社会化論に関する一考察
—ジュニアヨット選手の活動開始時に着目して—

久保和之*，谷　健二**，川西正志**，守能信次***

A Study of Subjective Socialization
— Focusing on Socialization Process of Junior Yacht Club Members in Japan —

Kazuyuki KUBO, Kenji TANI, Masashi KAWANISHI and Shinji MORINO

Abstract

The purpose of this study was to examine subjective sport socialization through classification of socializing reasons. Subjective sport socialization is important to get involvement activity. There are two socialization types. One is passive socialization, and the other is positive socialization. Authoer classified and compared the passive and the posive socialization.

The data of this study were collected by a questionnaire mailed to 1276 children who belonged to junior yacht clubs in Japan from August to September in 1996.

The main finding were as follows:

1) About 50 % of the children had started yachting due to their parent's encouragement, and few children started yachting without any encouragement from others.

2) The family influences were stronger than the friend's to get started yaching. About 50% of resons to get started yachting were concerned with parents and about 20% were concerned with siblings, and 10% were concerned with friends. There are few reasons concerned about trial ride and yachting environment.

3) The children seemd to socialized passively were took a force from parents and there is no differencies among age and sex.

4) It is important reason to see the yachting for positive socialization. But there are few children motived by themself, so they started yachting through interaction with others.

I　緒言

文部省の報告によれば子どもの体力は年々低下しており，子どものスポーツ活動の重要性が様々なところで言われている。しかし，子どものスポーツ活動の現状を見ると，勝利至上主義による練習の過熱化やオーバーワークによるスポーツ傷害が多発しており，活動から離脱する

*大学院生，**鹿屋体育大学，***教授

バーンアウトやドロップアウトなどの問題があることが明らかにされている[28) 30)]。また，子どもの活動に親が過剰に関与する事により，大人の文化であるスポーツを子どもに押しつけているという批判がでている[8)]。これまでに行われた子どものスポーツへの社会化研究は，主に性差や社会化のエージェントとしての重要なる他者について分析されており，社会化する個人の主体性について検討した研究は1980年代から行われるようになった。それらを示したのが表1である。社会化される個人の主体性について太田[14) 15) 16)]は，社会化を価値の内面化であると捉え，価値や価値意識から社会化を検討し，「主体性」に立脚した「スポーツへの社会化」研究の可能性を述べている。また，そこでは「主体」をスポーツに導く価値について検討しており，「健康」「体力づくり」「大会出場」「技術」などの１２の価値を分析し，関心と価値意識との関連をみることを今後の課題として示している。さらにスポーツ価値を類型し，今後の主体

表１　主体的社会化研究

年	著　者	テーマ	視　点	課　題　等
1980	太田雅夫ら	スポーツへの社会化	主体性形成過程 価値・価値意識	主体性に立脚した研究の必要性・可能性
1981	太田雅夫ら	スポーツ参加を導く価値	大人と子どもの違い	スポーツに対する価値意識
1981	船津　衛	スポーツ活動のあり方	社会的相互作用	現実的，日常的生活の論理とスポーツの世界の論理
1981	三本松正敏	社会化研究の展開と課題	社会的学習理論の検討	個人の主体性的・能動的側面を考慮することが課題
1982	三本松正敏	社会化論 理論的枠組み	社会的役割―社会システム論	１）個人－スポーツ－社会を結ぶ概念 ２）個人とスポーツの関わりを動的過程と捉える。
1983	太田雅夫ら	社会化研究の枠組み	主体的社会化論	スポーツにおける価値 価値の類型
1984	岡田　猛ら	社会化論	社会化の革新的側面 社会的役割・社会的体系研究法 相互作用	５つの欠点 アリソンのスポーツ的社会化 個人の主体性
1987	山本清洋	子どものスポーツに関する社会化研究の現状と課題 子どもの特性と現状	1972～1985の海外の文献4領域 国内の17文献レビュー6領域 スポーツ的社会化研究の課題	Socializee側からのアプローチマクナイルの社会化モデル 認知的発達論
1988	北村　薫ら	社会化論	相互作用過程 シンボリック相互作用論	コーホート分析の有効性
1990	吉田　毅	主体的―受身的論争	主体的自我論	自我の主体性
1991	海老原　修	スポーツ社会化における成果と課題	交渉と相互的影響	バーンアウト ドロップアウト
1991	山本教人	社会化論	G. H. ミード自我論	ミード自我論の問題点
1992	吉田　毅	社会化論	ハーバーマスの社会化論 主体性の獲得過程	主体性獲得過程の有効性
1994	田中鎮雄	社会化理論	教育社会学 家族と社会化	新しい理論の構築
1994	山本教人	社会化論	G. H. ミード自我論「I」「me」	再解釈されたミード自我論の有効性

的社会化論の方向性についても考察しており，これまでの社会化研究を①社会中心論(Societalism)，②相互作用論(Interactionism)，③個人中心論(Individualism)と分類し，Kenyonらの研究は社会中心論であり，個人の主体性は考慮していないと指摘している。また，今後の課題として1）個人中心論の立場にたったポジティブな社会化論の展開，2）パーソナリティに形成された資質内容としての価値も留意することをあげている。しかし，そこでは「スポーツにおける社会化」を「スポーツにおける価値（望ましさ）を，個人が主体的に内面化していく過程」と定義しており，社会化は受動的（受身的）には行われないものと捉えている。これは従来の社会学習理論や相互作用論と異なった視点であり，実証的な研究が行われていないので，一般化するには多くの実証的研究蓄積が望まれる。また，岡田ら[13]はAlison (1982)のスポーツ的社会化論をもとにエージェントと個人の相互作用の観点からスポーツと社会化論について検討している。そこではこれまでの社会化研究において5つの問題点があると指摘しており，ナヴァホ・インディアンの生徒とアングロ・コーチとの相互作用について着目し，Socializeeの主体性を考察している。これまでの社会化研究ではあまり見られなかった主体性について着目しており，これから国内においても検討される必要があると考えられる。北村ら[11]は主体的社会化論に立脚した社会化論研究を展開しており，そこでは相互作用過程を構造化した分析枠組みの必要性を述べている。また，シンボリック相互作用論や自我の観点から社会化を捉えようとしているが，困難であることを指摘している。さらに，家族社会学において注目されているライフコース分析・コーホート分析を試み，コーホート分析の有効性を明らかにしている。山本[25) 26) 27]は，個人の主体性を考慮すべきだとする者でも「人間の主体性を社会化論の中にうまく取り込めていない状況にあるように思われる。」と指摘しており，G. H. ミードの自我論から主体性について検討している。そこでは「ミード自我論の『I』側面に主体性の根拠を見いだすことは困難であり，それを個人の主体性を保証するスポーツ的社会化論に適応できない」と述べており，ミード自我論を社会化研究に適応するには問題があることを述べている。また，これまでのスポーツ的社会化研究の結果をまとめ，問題点を明らかにするとともに，「I」と「me」の分析視点からミード理論の再解釈を行い，その有効性を示している。吉田[33) 34]は「社会化される個人の主体的—受身的論争」に着目しており，社会的自我論（主体的自我論）についてまとめている。同様に海老原[9]も「社会化される個人の主体的—受身的論争」を取り上げ，「主体的社会化はスポーツ・ドロップアウトやバーンアウトを解くキーであると考えられる」と指摘している。また，社会化の相互的影響について相互作用の性差をまとめるとともに，費用便益軸を用いてスポーツ・ドロップアウト，トランスファー，バーンアウトを考察しており，1）具体的な便益軸の設定，2）主体的社会能力の獲得方法の解明を今後の課題としてあげている。また，「最近は主体的社会化という視点を重視するようになっている」と述べ，主体的社会化とはSocializeeの主体性に焦点をあてる社会化と考え，ハーバーマスの社会化論を基に考察し，社会化を「社会的価値・規範を内面化していく過程」と捉えるよりもむしろ，「主体性の獲得過程」と捉えている。そこではスポーツにおける社会化において，「主体性を獲得していく過程」とする考えは有効性が高いことを示唆している。

以上，主体性に基づいたスポーツへの社会化研究を概観すると，1980年代のはじめに太田や三本松らが社会化する個人の主体性に着目する必要性を述べているにもかかわらず，社会化を能動的・積極的に捉えようとする研究は少ないのが現状であり，社会化する個人の側からのアプローチが求められている[29]。また，ほとんどの研究が社会化する個人の価値や自我に注目しており，主体的社会化論の有効性を示唆しているだけにすぎず，主体的に社会化した者や社会化過程に着目したものは皆無に等しいのが現状である。

そこで本研究の目的は具体的な社会化要因から活動を開始する個人の主体性について考察し，主体的に活動を開始した者と受身的に開始した者の特長を明らかにすることとした。

Ⅱ 方法

調査対象は全国のジュニアヨットクラブに所属している選手1276名とした。調査方法は所定の質問紙を用いた代表者を介しての郵送法であり，調査は1996年8月から9月上旬にかけて行なった。調査内容は個人的属性，ヨット開始時期，開始時の重要なる他者，開始した具体的な理由である。回収後は，活動開始時の重要な人物及び，開始理由についての自由回答の項目をＫＪ法による分類を行い，属性や開始時の影響などの特性を明らかにした。本研究では，山本(1994)が示した社会化過程における個人の主体性を説明するのに有効である再解釈されたミードの自我論を基に分析を行った。回収数は309部であり，回収率は24.2%であり，対象者の特性は表2に示したとおりである。

表2 サンプルの特性

項目	人数	%
性別		
男	114	65.1
女	59	33.7
N. A.	2	1.1
年齢		
7～9	36	20.6
10～12	81	46.3
13～15	51	29.1
16歳以上	5	2.9
N. A.	2	1.1
開始時期		
小学校以前	3	1.7
小学校低学年	24	13.7
中学年	62	35.4
高学年	22	12.6
不明	53	30.3
中学校	11	6.3

Ⅲ 結果及び考察

1．重要な人物

ヨットを開始する際に影響を及ぼした人物についてまとめたのが表3である。これまでのスポーツへの社会化研究(Socialization into Sport)では，社会化の要素の1つとして重要なる他者(Significant others)に着目されているが，わが国では他者からの受け身的な社会化のみが考えられてきた。しかし，社会化する個人の主体性に立脚したアプローチが必要なことから，本研究では，開始時の重要な人物として「自分」を含めて分析を行った。その結果，「両親」の影響を受けたとする者が55.1%と最も多く，海老原[3)]の結果と同様の傾向を示した。また，主体的に開始したと考えられる「自分」と回答した者は僅か7%であり，他者との相互作用を通して活動を開始していく者の割合が多かった。しかし，すべての者が受け身的に活動を開始しているわけではなく，主体的に開始していると考えられる者もみられることが明らかになった。

2．開始要因（要因別）

活動を開始した際の具体的な理由を自由記述形式で聞いたところ，全体の94%である292名からデータが得られた。KJ法によって分類した内訳をまとめたのが表4である。約半数の51%の者が両親に関する内容であり，次いできょうだいに関係するものが23.3%であった。ヨットを行っているきょうだいも親からの影響を受けていると考えられることから，やはり子どものヨット活動開始には両親の影響が強く働いていることが窺える。

表3 重要な人物（n=301）

区分	人数	%
自分	21	7.0
両親	166	55.1
きょうだい	64	21.3
友人	22	7.3
その他	28	9.3

表4　開始理由（n=292）

区分	人数	%
両親	149	51.0
きょうだい	68	23.3
友人・知人	29	9.9
広告・本	13	4.5
教室・体験	13	4.5
海・ヨット	8	2.7
その他	12	4.1

両親に関連する開始理由（n=149）では，父親に関するものが約6割（n=89），母親が約1割（n=18），両親が3割（n=42）となっており，父親が関連している開始理由が多かった。その中の具体的な理由としては父親がヨット活動を行っていることから子どもにヨットを勧めたものがほとんどであった。一方，母親に関連している開始理由では，ヨットを行っている母親に関する内容は見られず，ただ母親から勧められたとする内容がほとんどであった。また，両親に関する理由では，親から勧められたという内容と親のヨット活動について行っていたからヨットを開始したという内容であった。

きょうだいに関する開始理由では，ほとんどが活動を行っている兄・姉の影響を受けているものであり，弟・妹については「弟に負けたくなかった」という1例のみであった。同様に友人・知人に関連する開始理由でも，活動を行っているいとこや友だちから誘われたり，彼らの活動を見ることによってヨットを開始しているようである。これは，子どもが身近な人物との相互作用を通してヨットを学習し，参与していったと捉えることができる。

広告や本に関わる開始理由では，「アーサーランサム全集」「アメリカズカップ」「市報（新聞広告）」などを読んだり，聞いたりしてヨットを開始していているが，他者からの影響が直接な理由でないことから，本や広告を見て活動を開始する者は主体的に活動を開始していると捉えることができる。

開始理由のうち，ヨット教室や体験試乗会に関するものでは教室や試乗会が楽しかったからヨットを開始したというのが主な内容であった。ヨットの体験を通してヨットの楽しさを学習し，活動に対して主体的に取り組んで行ったことが考えられるが，ここでは教室や試乗会に参加するまでの経緯が明らかでないため，どこまでが子どもの主体性であるのかは不明である。子どもが自ら「教室や試乗会に行きたい」と言って体験するのと，親が強制的に教室や試乗会に連れて行ったのではきっかけが異なることから，さらに詳しい分析が必要である。

海やヨットに関する開始理由では自宅が海から近いことからマリンスポーツに触れる機会があったことと，実際にヨットを見ることによって楽しそうに思ったことが主な開始理由であった。このことはKenyonら[9]が示した3つの社会化要因のうち社会化状況(Socialization situation)に含まれるものであり，整った状況のなかで子どもが主体的に参与していったことが考えられる。わが国では，海岸線が長い割にはヨットを行っている場所が少ないことから，実際にヨットが帆走しているのを見てヨットを開始していく者は少ないのは当然の結果である。

3．主体性について

開始理由のうち，これまでスポーツ的社会化研究において問題とされてきた受け身的な社会化と考えられる理由を示したのが表5である。これらを見ると，ほとんどが親（大人）からの強制であり，ミードの自我論から見れば明らかに「ｍｅ」の立場であり，子どもが自ら望んでヨットを開始していないことが窺える。受け身的にヨットを開始した者の性別は男児が12名（75%），女児が4名（25%）であり，調査対象全体の割合と同様の結果であることから，特に性差はないと考えられる。また，開始当時の学年では，小学校以前2名（12.5%），小学校3年生6名（37.5%），4年生4名（25%），5年生2名（12.5%），6年生（12.5%）であった。子どもの成長とともに自我が発達することから受け身的に開始する者は早期に開始するのではないかと思われたが，結果は小学校3年生以上

表5　受け身的な開始理由

理　　由	開始時期	性別
父がむりやりに	小4	男
父がむりやり入れた	小3	女
父がヨットのマストに縛りつけたから	1歳	女
父が勝手に入れた	小4	男
お父さんに無理に行かされた	小3	男
父親に無理に行かされた	小3	男
母が「行け」て言ったから	小3	女
親が行けと言ったから	小3	男
両親から強制的に	幼	男
両親が入れと言ったから	小5	男
むりやり連れて行かれた	小5	男
強制的	小4	男
強制的に入会させられた	小6	女
行けと言われたから	小4	男
勝手にやらされていた	小3	男
僕が希望して入りたいと言ってないのにおじさんが勝手に入れた	小6	男

表6　主体的な開始理由

理　　由	開始時期	性別	重要人物
クラブを見てて楽しそうだったから	小2	男	クラブ員
クルーザーに乗って面白かったから	小4	男	父親
やっているところを見て楽しそうだと思ったから	小3	男	先生
ヨットに乗れたらいいなと思ったから	小4	男	有名選手
一度見に行って楽しそうだったから	小5	男	父親
船やヨットを見て乗りたいと思った	小3	男	父親
海が近かったし，珍しいから。あと，面白そうだったから	中1	女	友人
なかなかできないスポーツだし，家から近いのでやってみようと思った	小4	男	母親
艇庫が自宅の近くで遊びに行っていて楽しそうだったので入会した	小5	男	友人
かっこよかったから	小4	男	先輩
チャレンジしようと思ったから	小4	女	父親
つりが好きで，少し泳げるから	小4	男	先生
テニスをやめたから	小3	男	母親
やりたいと思ったから	小5	男	自分
一度，ヨットなどをやりたいと思ったから	中1	男	自分
自分でやりたいと思った	小3	男	自分
日曜日ヒマだったから	小5	女	自分
面白そうだから，やりたいから	小3	男	父親
面白そうだったから	小3	男	父親
面白そうだったから	小6	女	自分

の子どもがほとんどであった。このことは，幼稚園や小学校低学年にヨットを開始した者の開始理由の記憶が曖昧であり，最初は自ら望んでヨットに行ったわけではないが活動が楽しかったことにより，強制的に行かされたことを意識していないことも考えられる。

一方，受け身的ではなく子どもが自分から望んで開始したと思われる開始理由をまとめたのが表6である。これらの開始理由はミード自我論の「I」の立場であり，他者からの影響を受けているわけではなく，自らの意志によって活動を開始している。自ら望んでヨットを開始したと思われる者の開始時期においても受け身的に開始した者と同様に，特に目立った特徴はなく，小学校2年生から中学校1年生の時に開始した者がばらついてみられた。性別では8対2の割合で男児の方が多いがサンプル全体の割合から考えるとあまり性差がないことが窺える。開始理由の主な内容は，ヨットを見て楽しそう・面白そうと思ったことであり，その他には自宅が海から近いことや珍しいことからヨットを開始しているようである。自分の意志でヨットを開始した者の開始時における重要人物をみると，「自分」とする者が5名ほど見られたが，その他の人物の影響を受けている者が多いことが明らかになった。このことは，他者を役割学習のモデルとして捉えているものと他者からの勧めを主体的に受け止めているものが考えられる。いずれにせよ，他者の影響を受けずに自らの意志によってヨットを開始している者は非常に少ないことが明らかになった。

Ⅳ まとめ

本研究の目的は具体的な社会化要因から活動を開始する個人の主体性について考察し，主体的に活動を開始した者と受身的に開始した者の特長を明らかにすることであった。そこで，全国のジュニアヨットクラブに所属している選手を対象として質問紙調査を実施した。これまでの主体的社会化論に関する研究は，主にスポーツへ社会化する個人の主体性について考慮されていないことから，個人の主体性についての理論検証を行うものであった。しかし，なにをもって主体的というのかがはっきりしておらず，実証的な研究もないため，理論の適応可能性について述べられているにすぎなかった。本研究では，社会化する個人の主体性をミード自我論の「I」と「me」の視点から捉え，考察を行った。社会化する際の重要な人物について，「自分」と回答した者は僅かであり，9割以上の者が他者との相互作用を通して活動を開始していることが明らかになった。また，問題であるとされてきた受け身的に社会化したと考えられる者は全体の約5％であった。今回の対象はヨット選手のみであり，他のスポーツ種目であれば割合が異なることが考えられるが，子どもの多くは他者との相互作用を通じて主体的に社会化していったと捉えることができる。そこで，スポーツ活動を開始する際の主体性は特に重要ではなく，受け身的に開始した者でも活動を継続して行っている者が見られることから，子どものスポーツ活動の問題点は社会化した後の活動状況ではないかと考えられる。また，本研究の結果からは，主体的に活動を開始した者と受け身的に開始した者との相違点は特に見られなかった。このことは，今回の調査が多くのデータから表面的な現象だけを捉えていることによるものであると思われ，今後は主体的に開始した者と受け身的に開始した者や家族にインタビューを行ったり，子どもを取り巻く環境などを詳しく分析する必要がある。

参考文献

1） Allison, M., (1982) Sport, Culture and Socialization, International Review of Sport Sociology, pp 69-87.

2） Coakley, J. J. (1986) Socialization and Youth Sports, Sport and Social Theory, Human Kinetics Publishers, pp 135-143.

3） 海老原修 (1991) スポーツ社会化における成果と課題，体育・スポーツ社会学研究 10, pp 153-171.

4）江口　潤・山本清洋 (1987) ヤングフットボーラーの社会化能力，日本体育学会第 38 回大会号 p124.
5）船津　衛 (1981) スポーツと社会的相互作用―スポーツ社会学への一視角―，一流競技者の社会学，体育社会学研究会編，道和書院，pp 87-106.
6）Gill, D., Gross, J. and Huddleston, S. (1983) "Participation motivation in youth sport." International Journal of Sport Psychology, 14, pp 1-14.
7）濱島　朗・竹内郁郎・石川晃弘 (1985) 社会学小辞典増補版．有斐閣.
8）影山　健 (1987) 子どものスポーツの問題点，体育・スポーツ社会学研究 6 子どものスポーツを考える，pp 1-26.
9）Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (1973) Becoming involved in physical activity and sport;a process of socialization, N. Y. Academic Press pp 303-332.
10）Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (1986) Socialization Theory and research; toward a "New Wave", Human Kinetics, pp 111-134.
11）北村薫ら (1988) スポーツ参加率のコーホート分析．日本体育学会第 39 回大会号．p126.
12）久保和之・川西正志・宮田和信・守能信次 (1995) 一流高校選手のスポーツへの社会化―種目別の専門種目に開始時期に着目して―．日本体育学会第 46 回大会体育社会学専門分科会発表論文集.
13）岡田　猛，山本教人 (1984) スポーツ社会化論についての一考察― Social Agent と Socialization の相互作用の観点から―．体育・スポーツ社会学研究 3 pp79-95, 1984.
14）太田雅夫ら (1980)「スポーツへの社会化」研究の方向性に関する一考察．日本体育学会第 31 回大会号 p207, 1980.
15）太田雅夫ら (1981) スポーツにおける社会化の研究―スポーツに対する価値意識分析から―．日本体育学会第 32 回大会号 p239.
16）太田雅夫ら (1983) スポーツにおける主体的社会化論の研究．順天堂大学保健体育紀要 26，pp 9-16.
17）Passer, M. (1981) "Children in Sport: Participation motives and psychological stress." Quest, 33 (2), pp 231-244.
18）Sage, G. (1980) "Orientation toward sport of male and female intercollegiate athletes." Journal of Sport Psychology, 2, pp 355-362.
19）Snyder, E. and Purdy, D. A. (1982) "Socialization into sport: parent and child reverse and reciprocal effects". Research Quarterly 53 (3), pp 263-266.
20）Snyder, E. and Spreitzer, E. (1973) "Family influence and involved in sport: sex differences." Research Quarterly 44 (2), pp 249-225.
21）三本松正敏 (1981) スポーツ社会学における"社会化"研究の展開と課題．福岡教育大学紀要 31, pp 139-149.
22）三本松正敏 (1982)"スポーツ（的）社会化"研究の展開と課題．日本体育学会第 33 回大会号 p172.
23）田中鎮雄 (1994) Sport Socialization 研究のパラダイム―「教育社会学」の社会化研究の review を中心として―．日本体育学会第 45 回大会体育社会学専門分科会発表論文集.
24）山口泰雄，池田　勝 (1987) スポーツの社会化．体育の科学 37 (2), pp 142-148.
25）山本教人 (1991) ミード自我論のスポーツ的社会化論への適応可能性．日本体育学会第 42 回大会号．p168.
26）山本教人 (1992) 主体性のパラドックス．日本体育学会第 43 回大会号．p137, 1992.
27）山本教人 (1994) Mead 理論の検討とそのスポーツ的社会化論への適応可能性：「I」は主体性のベースか，体育学研究 Vol. 38 No. 6,pp 413-424.
28）山本清洋 (1982) 少年期のスポーツ的社会化に関する研究―勝利志向の構造と形成過程―．日本体育学会第 33 回大会号 p174.
29）山本清洋 (1986) 少年期におけるスポーツ的社会化の研究―子ども文化としてのスポーツ―．体育・スポーツ社会学研究 5 pp 1-21.

30) 山本清洋，江口　潤 (1987) 社会化能力形成過程の分析．日本体育学会第 38 回大会号 p 125.
31) 山本清洋 (1987) 子どもスポーツに関する社会化研究の現状と課題．体育・スポーツ社会学研究 6 pp 27-49.
32) 山本清洋 (1989) 少年期におけるスポーツ的社会科に関する研究—子どもの生活にみるスポーツ空間の構造分析—．日本体育学会第 40 回大会号 p163.
33) 吉田　毅 (1989) 競技者における役割形成過程に関する考察—特にバーン・アウト競技者に着目して—．日本体育学会第 41 回大会号．p166.
34) 吉田　毅 (1990) スポーツの社会化における「主体的—能動的論争」の検討．体育・スポーツ社会学研究 9，pp 103-122.